

彩の歳時記

平成二十五年

二月

わが園に 梅の花散る ひさかたの 天より雪の流れくるかも

大伴旅人【665～731】

「わが園に梅の花が白く、舞い散っています。天から雪が流れてくるのでしょうか」

太宰府の旅人邸宅での梅花の宴で詠まれた歌。梅は中国原産ですが、古くから日本に伝わり、万葉集では菘に次ぎ多く、百十九首が収められ、雪と共に詠まれた歌が目立ちます。

当時は、異国の植物として珍重され、外国への玄関口であった太宰府にふさわしく、エキゾチックな雰囲気醸し出していたのかもしれない。梅の花がほころび始め、春の予感を感ずる頃、受験生で賑う天神様の境内で親梅を楽しみつつ、春の到来を待ちたいものです。



二月の異称

如月 絹更月、衣更月とも。寒さで着物を更に重ねて着ることから、「着更着」とする説が有力。

二月の暦

一日 テレビ放送記念日 六十年前の1953(昭和28)年のこの日、内幸町の東京放送会館から

「JOAK-TV」(現在はNHK東京テレビジョンであります)の第一声が放送された。



三日 節分

各季節の始まりの日(立春・立夏・立秋・立冬)の前日。季節を分ける日。節の変わり目には邪氣(鬼)が生じると言われ、それを追い払う行事が【豆撒き】。



四日 立春(二十四節気) 春立つ日。東風(こち)凍りを解く【七十二候】

東風吹かば 白い起こせよ 梅の花 あるじなして 春を忘るな

菅原道真【845～903】

天神『天満宮』は「道真が死後、雷神となり、天に満ち「天満(そらみこ)大自在天神」と

なった事に由来、優れた学者であったことから「学問の神様」に。



八日 針供養 折れ、曲がり、錆びなど、使えなくなった縫い針を供養する日。浅草寺・淡島堂。

十一日 建国記念の日「建国をしのび、国を愛する心を養う日」戦前までは「紀元節」。国民の祝日。他の祝日が祝日法に定めているのに、この日のみが「政令で定める日」。

十二日

菜の花忌『竜馬がゆく』で有名な司馬遼太郎【1923～1996】の忌日。野の花である菜の花を



好んだ事に因る。九日に、シンポジウムと司馬遼太郎賞受賞者「赤坂真理と片山杜秀氏」の贈呈式。

十五日

西行忌 平安時代の武士・僧侶・歌人・西行【1118～1190】の忌日。その生涯は平家物語、源平盛衰

記、吾妻鏡に描かれている。如月(二月)望月(十五日)と願い、十六日に、ほぼ、願いどおり没。

願はくは 花の下にて春死なん その如月の 望月の頃

十八日

雨水(二十四節気) 空から降るものが雪から雨に変わり、寒さも和らぐ頃。

二十二日

多喜二忌 『蟹工船』で知られるプロレタリア作家、小林多喜二【1903～1933】の忌日。

秋田生まれの小樽育ち。小樽高商(小樽商科大学)卒。特高警察の拷問により警察署内で死亡。井上ひさしの遺作、戯曲「組曲虐殺」は多喜二の評伝劇。「ミュージカル界のプリンス」と呼ばれる井上芳雄が多喜二を演じ、評判に。



二十三日

皇太子誕生日 皇太子徳仁親王殿下は昭和三十五(1960)年に生誕された。

趣味はヴィオラ演奏・登山・ジヨギング。日本赤十字社 名誉副総裁。国連「水と衛生に関する諮問委員会」の名誉総裁



二月の歌

心の窓にともし灯を 昭和三十四(1959)年

作詞の横井弘【1926～】は他に「あざみの歌」「哀愁列車」「さよならはダンスの後に」「下町の太陽」「川は流れる」など昭和の大作詞家。

作曲の中田喜直【1926～2000】は、父は「早春賦」の作曲家の中田章、兄は作曲家・ファゴット奏者の中田一次。童謡や抒情歌を中心に「ちいさい秋みつけた」「めだかの学校」「夏の思い出」「雪の降る町を」等。

この歌は「NHK歳末助け合い運動」の一環として作成され、ダークダックス・ベギー・葉山・ザ・ピーナッツ等が歌唱。

いじわる木枯らし 吹きつける
古いセーター ぼろシューズ
泣けてくるよな夜だけど
ほっぺをよせてともしましょう
心の窓にともしびを ホラ
えくぼが浮かんでくるでしょう
中略
暖炉をかこんだ 歌声を
遠く聞いている 細い路地
ちっちゃなたき火は消えたけど
お空をみつめ ともしましょう
心の窓にともしびを ホラ
希望がほのぼのわくでしょう